1960年代，ノッティングヒルの「新しい」コミュニティ活動に関する研究序説

――スチュアート・ホールからの問い――

西　川　麦　子

は　じ　め　に

ロンドン西部のハマースミスにおいて，筆者は2001年より，「多様な人々が集まり移動する都市空間において，どのように地域社会が創出されるのか」というテーマで，住民組織，活動についてのフィールドワークを行ってきた（西川2004，2007，2009，2010a）。その調査過程で，1958年の人種暴動後のノッティングヒル（ノース・ケンジントン）[1] における1960年代，70年代に行われたコミュニティ活動の取り組みが，40年をへた現在のロンドンにおける住民組織作りにも影響していることを知り，関心を抱くようになった。1960年代のノッティングヒルには，国内外からの移民にたいする人種差別，貧困，失業，犯罪，劣悪な住環境など，都市の，あるいは第二次世界大戦後のイギリスの社会問題が山積していた。多様な団体，組織，そして異なる思想をもつ個人が，それぞれの立場からノッティングヒルに関心を寄せ，住民を巻き込み多彩な活動を試みた。テナント・アソシエーションが結成され，コミュニティ・センター，無料の法律相談所，子供の遊び場などが開設され，住民活動の拠点となった。若者が集まるレゲーなどのクラブ，年齢を問わず教え学び合う自由学校が開かれ，カーニバルが開催され住民間の交流がはかられた。また，対抗文化的な志向をもつ若者が集まり，独自のアート活動を繰り広げた（西川2007：39-40）。

本稿では，60年代のノッティングヒルについて，筆者が2011年に行ったスチュアート・ホール（Stuart Hall：1932-2014）へのインタビューを手がかりに，多様な階層，人種，出身地の人々が集まり異なる文化がぶつかり合う状況の何に着目し，どのように研究をすすめるのかを述べていきたい。1では，これまでの調査の経緯と私がノッティングヒルに関心をもつきっかけとなったコミュニティ活動家ジョージ・クラーク（George Clark：1926-1997）について説明する。2では，スチュアート・ホールとの出会いと2011年のインタビュー内容を紹介し，クラークとホール，そして初期のニュー・レフトとのつながりを明らかにする。3では，1992年に陳光興が行ったホールへのインタビューをもとに，ホールやニュー・レフトがノッティングヒルにおける動きの何に着目していたのかを，2011年の筆者によるインタビューと合わせて考察する。

これらをふまえ，4では，ホールがいう多文化接触の移行地帯における「新しい」地域活動をとらえる視点と方法についてまとめる。1960年代は，マスメディア（ラジオ，テレビ，新聞，雑誌など）が人々の生活に深く入り込み大きな影響力をもつようになるその一方で，一般の人々が生活の場から発信するオルタナティブ・メディアが作られ，双方が関わりながら地域の運動が展開していた。そこで，住民に働きかけるアクターたちの「メディア戦略」「場の作り方」「外部との連携」に注目することによって，本研究が，60年代のノッティングヒルという局地的な問題にとどまらず，グローバリゼーションがすすんだ現代において，その場所に必ずしもルーツをもたない人々同士のつながり方や，生活の場所としての地域との関わり方を探る問いかけを含むのではないかと考えている。

1　ジョージ・クラークをめぐる調査の展開

1-1 コミュニティ活動家ジョージ・クラーク

ハマースミスにおける現地調査から1960年代のノッティングヒルにおけるコミュニティ活動[2] に関心をもった私は，まずは，地元のケンジントン中央図書館へ通い，地方史のコーナーにおいて当時の住民や活動家が作成したドキュメント（ポスター，フライヤー，議事録，ニューズレター，地方新聞など）を閲覧した。またインターネット検索や，新聞図書館において，全国紙の新聞記事などを調べた。実地調査と資料調査をと

おして私が注目したのは，コミュニティ活動家ジョージ・クラークである。クラークは，1926年生まれ，1950年代後半に反核武装運動（Campaign for Nuclear Disarmament: CND）の活動家として頭角を現し，1960年代半ばにはノッティングヒルに移り住み，その後30年あまりを同地域のさまざまな住民活動に携わり，1997年に亡くなった。彼の活動のキーワードは一貫して地域「コミュニティ」であった。反核武装運動においても，オルダーマストン行進，100人委員会，トラファルガー広場における座り込み，など全国的に注目された活動に深く関わる一方で，1962年には反核や平和運動に関心をもつ若者を組織しバスを借り地方を巡回し，そこで住民との対話のなかで反核運動を伝えるキャラバン・ワークショップを実施した[3]。1964年に渡米し，公民権運動やコミュニティ活動についての情報を集め，英国に持ちかえった。ノッティングヒルにおいては1966年から本格的に住民組織活動に参加し（Clark 1972: 187），住宅問題などに取り組んだ。1967年にはクラークが提案し，ノッティングヒル・サマー・プロジェクトが実施され，全国から数百人の学生や研究者，さまざまな市民が集まり[4]，そこで地域の住宅調査も実施された。1971年には，クラークは，ゴルボーン区の住民組織作りに関わり，ゴルボーン・ネイバーフッド・カウンシルが結成された（Clark 1972: 188-189, 西川 2007：40）。

1972年には，ノッティングヒルにおけるコミュニティ活動の経験と方法を応用して，都市の貧困問題を解決しようと，ジョージ・クラークが政治家や研究者，宗教家に呼びかけ都市貧困問題委員会（City Poverty Committee: CPC）を設立し（Clark 1972: 191），自らがディレクターをつとめた。翌年，ハマースミス・コミュニティ開発プログラム（Hammersmith Community Development Program: HCDP）を開始し，翌年には，対象区にグローブ・ネイバーフッド・センター（Grove Neighbourhood Centre: GNC）を開設した。ここを活動拠点にして住民に働きかけ，住民選挙を実施しネイバーフッド・カウンシルを結成した。

GNC は，40年をへた現在もコミュニティ・センターとして存続している。2001年に私がハマースミスに滞在した際には，住民ボランティアとして GNC の運営委員となり，そこから私のロンドンにおける地域調査が始まった（西川 2004）。そして，GNC の設立経緯を調べているうちに，HCDP や CPC，およびその主要メンバーであるジョージ・クラークについて知り，彼の活動の原点である60年代のノッティングヒルに関心をもつようになったのである。

以上のように，故人であるジョージ・クラークが，私をハマースミスからノッティングヒルへ，現在から60年代へと案内してくれたことになる。それだけでなく，実地調査とドキュメント調査をとおして，クラークについて，とくに２点に関心をもった。

１つには，クラークの活動は，私が2000年代のロンドンの実地調査において観察してきた現在進行形の住民組織作りの取り組みと共通する点が多いことである。クラークや関係者は，1960年代から70年代にかけての都市部の地域開発プログロムにおいて，既存の地域コミュニティがない，住民意識が薄い地区をあえて選んでコミュニティ作りを試みた。クラークが1960年に主張したコミュニティ意識（community sense）の育成（Hall 1960）とは，都心回帰とジェントリフィケーションがすすんだ1990年代以降のロンドンにおいて，ミドルクラスを中心とした新しい住民たちが，地域作りにおいてまさに取り組んでいた問題でもあった（西川 2009，2010a）。1960年代のノッティングヒルの諸活動が，今日の都市における地域社会を考えるうえでのヒントを含んでいるのではないかと考えた。

もう１つ，文献調査から興味を持ったのは，ジョージ・クラークと初期のニュー・レフトの活動との関わりについてである。クラークは，ノッティングヒルの「ユニバーシティーズ・アンド・レフト・レヴュー・クラブ」（Universities and Left Review Club）に参加し，人種暴動の要因を探る調査グループのセクレタリーをつとめていた。『ニュー・レフト・レヴュー』創刊号（*New Left Review,* 1960: 71-72）に掲載された “ULR Club at Notting Hill” は，クラークの覚え書きをもとに，スチュアート・ホールが文章にまとめたものである（Hall 1960, 西川 2007）。その後もホールとクラークのあいだには，1990年代に至るまで長年にわたる交流があり，クラークがノッティングヒルに移り住んだ後に企画したプロジェクトの関係文書には，しばしばホールの名前が掲載されている[5]。地方の一活動家のクラークが，ニュー・レフトの活動家，カルチュラル・スタディーズを代表する研究者，著名な文化理論家であるスチュアート・ホールとどのように関係していたのか，ぜひ知りたいと思った。

1-2 一様ではないジョージ・クラーク像

2007年以降は，1960年代のノッティングヒルについてのドキュメント収集だけでなく，そこに名前が掲載されている活動家たち[6]への取材を始めた。コミュニ

ティ活動家，社会主義者，組合活動家，平和運動家，アーティスト，フィルムメーカー，写真家など，さまざまな立場，分野で活動してきた人々から話を伺った。インタビュー当時，60歳代から80歳代の方々が1960年代の自分の体験を詳しく生き生きと語った。しかし，元活動家たちのクラークへの評価は，当時の雑誌や新聞記事から想像していた「良き」活動家とは大きく異なっていた。

ジョージ・クラークは，周囲とのトラブルが絶えない，付き合い方が相当に難しい人物だったようだ（Holmes 2005: 44）。1960年頃には勤務していた会社を辞め，以後はコミュニティ活動に専念した。定職には就かず，助成金を得てさまざまなプロジェクトを企画，運営し，彼の活動に賛同する人々から資金や時には住居を提供された。また，各地に年配の裕福な女性ファンがおり彼の身の回りの世話をしていたという。しばしば，借金をめぐるトラブルを起こし，活動仲間の住居にある家具などが勝手にクラークの借金の抵当に入れられたこともあった。クラークには，演説の才能があり，場所を問わず，長時間話し続け聴衆を引きつけた。しかし，話の内容はしばしば矛盾した。前日の集会で，同じプロジェクトのメンバーと議論したことが，翌日の新聞記事に，クラークの話としてセンセーショナルな見出しとともに掲載され，しかし，前日に打ち合わせた内容とは全く違う，ということも珍しくなかった。

ロンドンにおける取材では，ある人は，ジョージ・クラークという名前を聞いただけで怒りがこみ上げてくる様子だった。ある人は，クラークだけは，自分たちの活動グループに入れないと決めていたと話した。書類上はイベントや組織の「ディレクター」という肩書きは残っていても，それらが実施される段階では，運営委員会から追い出されている場合もあった。クラークは，私にとってはノッティングヒルへと導いたキーパーソンではあるが，私は，クラークが残した言葉に翻弄され「誤った」調査をしているのだろうか。しかし，彼の人格や行動に問題があったとしても，クラークの言動が多くの人々を触発し，彼が企画するプロジェクトへと引き寄せたこともまた事実であろう。人々は，ジョージ・クラークの言葉，パフォーマンスに何を期待し，何を裏切られたのかを考えることは，60年代という時代の状況にふれる一つの手がかりになるかもしれない。そう考え，当時のノッティングヒルの活動に関わった人々と会うたびに，その人の活動について話を伺うとともに，クラークについても尋ねた。そして2011年には，クラークと最も早い時期からの知り合いであるスチュアート・ホールへインタビューする機会をえた。次のような経緯である。

1-3 調査の予期せぬ展開

2011年２月にロンドンで，オマリー夫妻（Jan & John O'Malley）を訪ねた。ジャンとジョンは，1962年にジョージ・クラークが組織したキャラバン・ワークショップに参加して知り合った。ジャンはまだ16歳，ジョンは23歳だった[7]。２人は，60年代半ばから70年代半ばまでノッティングヒルに住んだ。1966年にノースケンジントン・プレースペース・グループ（North Kensington Play-space Group）を仲間とともに組織し，また住民たちそれぞれが抱える住宅，育児，労働などの問題に取り組むピーポーズ・アソシエーション（People's Association）など，地域の問題，人々の暮らしに根ざした活動に深く関わった。夫のジョンは，ホールをはじめ，当時のニュー・レフトの活動家，研究者とも交流があり，妻のジャンは，大学院に進学し，1977年に『コミュニティ・アクションの政治－ノッティングヒルにおける10年の闘争』（Jan O'Malley 1977）を出版している。2008年に夫妻と初めて会ったとき，私は，前年に書いた日本語論文（西川 2007）[8] を英訳し夫妻に渡した。夫妻は，私の論文を読み，そこで扱われている人物の描き方が，とくにジョージ・クラークについては事実とは違うと指摘した。私には痛烈な批判であったがこの苦い経験のおかげで，当時の雑誌や新聞記事の「読み方」に注意をはらうようになった。夫妻とは，その後もお会いし，話を伺い当時の写真なども見せてもらった。

2011年２月に訪問した際には，オマリー夫妻にマイケル・ラスティン（Michael Rustin）について尋ねた。ラスティンは，クラークが発行した雑誌，『人民と政治』（*People & Politics* 1967）にホールとともに寄稿し，またノッティングヒル・サマー・プロジェクトについての論文（Rustin 1968）をまとめている。私は，ラスティンが勤務する大学ホームページに掲載されていたアドレスにメールを送ってみたが，連絡をとることはできなかった。ジャンは，古いノートを調べ，ラスティンの番号を見つけると即座に電話をかけた。

こうして３日後には，マイケル・ラスティンに会うことができた。ラスティンは，ニュー・レフトの活動をとおしてスチュアート・ホールからジョージ・クラークを紹介された。ラスティンは，オマリー夫妻のようにノッティングヒルを拠点に活動していたわけではな

いが，クラークの行動からは強い印象を受け次のような内容の話をしてくれた。「ジョージ・クラークの政府や体制にたいする極端な行動は，注目を集めた。たとえば，ベトナム戦争に反対するためにアメリカ大使館で開催された催しに正装して潜り込み，パーティの最中にいきなり立ち上がり，『ベトナム人民のために』と叫び，会場から放り出された。時には，大使館前でハンガーストライキを続けた。こうしたパフォーマンスは，支持者だけでなく，新聞記者にも事前に連絡をとっていた。いかなる政党にも組みせず，アナーキーな思想，過激な行動，自分の立場が危くなることなど意に介さない自己犠牲的な行為など，クラークの主張と痛快なパフォーマンスに引き込まれた人々が少なからずいた。」（西川 2014b: 18-20）

マイケル・ラスティンと会うことにより，調査は予期せぬ方向に展開した。ラスティンとホールは，互いのパートナーが実の姉妹であり，両家族は日常生活においても付き合いがあった。私は，ラスティンをとおしてホールへ連絡をとった。自己紹介とともに，「あなたとノッティングヒル，そしてクラークとの関係について知りたい」と書いた。ホールからは，翌日に長文の返信メールが届いた。

ホールはクラークをよく知っていた。メールには，「クラークは全国的な政治にはあまり関心はなかったし，また政党政治を強く嫌悪していた。彼の関心は一貫してローカル・コミュニティにあった。そういう意味で彼は，68年とそれ以降に起きる政治の大きな流れの先駆者だった」と書いている。また，私がメールのなかで，クラークとジョン・ホプキンズ（John Hopkins, 通称 Hoppy, 1937-2015）[9] を併記して60年代のロンドンの対抗文化の担い手として関心をもっていると書いたことにたいして，ホールは，「ジョージ・クラークは，自分が知る限りでは，当時のカウンターカルチャー（定義にもよるが），ドラッグやロックや超越的な経験などとは関わりはなく，それらのアーティストや知識人たちと一緒に論ずることは難しい」と指摘し，「ノッティングヒルの歴史は，あまりにも複雑で多様な要素が混在し未だきちんと書かれていない」と述べている。ホールがクラークと，長い付き合いであった事は確かだった。（西川 2014b: 20-24）

2 スチュアート・ホールへのインタビュー

2011年７月，私は再びロンドンへ行き，スチュアート・ホールを訪ねた。入院前であると聞いていた。話題を２つに絞ることにした。「ホールとクラークの関係」，「ホールにとってのノッティングヒル」についてである。ホールは，本や文具などがおかれた大きなテーブルがある食堂に私を案内した（写真１）。自分で紅茶を入れ，「ブリティシュ・キャロットケーキをどうぞ」と，緊張する私にすすめた。

写真１　Stuart Hall, July 16, 2011 筆者撮影

ホールはまず，初期のニュー・レフトとノッティングヒルについて，一つの講義のようにまとめて話をしてくれた。『ユニバーシティーズ・アンド・レフト・レヴュー』（ULR），ノッティングヒル暴動，イギリスの政治的背景，移民排斥を唱えるオズワルド・モズレー（Oswald Mosley）らファシストの台頭，ULR クラブとノッティングヒルでの活動，反核武装運動（CND），ジョージ・クラークと知り合った過程，などについてである。そこからは，私も質問をはさみながら，ジョージ・クラークについても尋ねた。ホールは，ジョージ・クラークをフルネームか，あるいはジョージと名前で呼んだ。１時間45分にわたるインタビューは，*Grassroots Media Zine* No. 2（図１, 図２）に12頁にわたって掲載している（西川 2014b: 27-38）[10]。本章では，インタビュー後半のクラークに関する話を中心に内容を日本語に要約して紹介する。

スチュアート・ホールとジョージ・クラーク

スチュアート・ホールはジョージ・クラークの特異な性格，行動を思い出しながら，どこか愉快そうにク

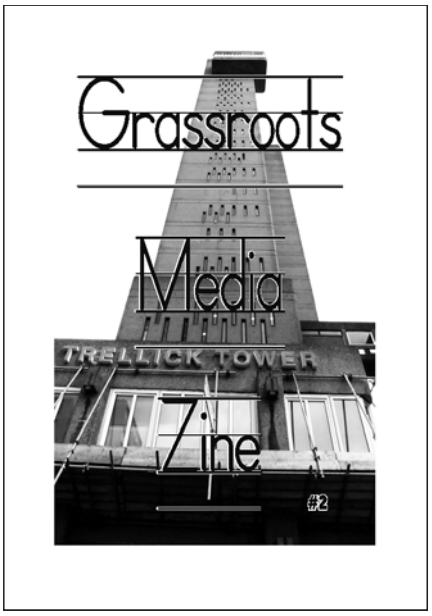

図１　*Grassroots Media Zine,* No. 2 表紙

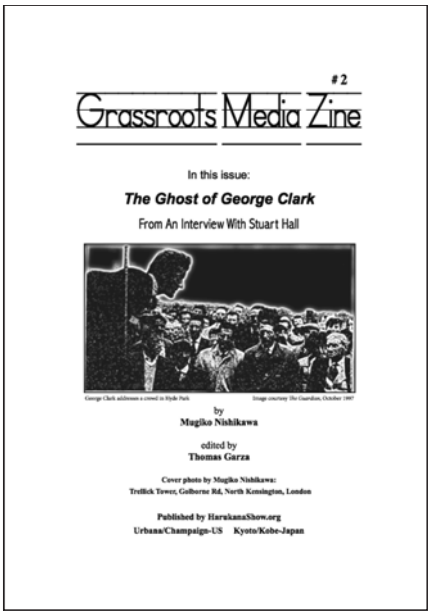

図２　*Grassroots Media Zine* , No. 2, 中扉

ラークについて話し続けた。「ジョージとは，深い付き合いではなかったが，ゆえに長年の『友人』であった。ジョージが，どのような経緯でニュー・レフトの活動に関心をもつようになったのかは分からないが，ULR クラブに顔を出し始めた当時は，メタル・ボックスという会社のマネージャーをしていた。ULR に集まる若者たちはジーンズ姿だったが，彼はいつもスーツを着て，ミドルクラス出身という印象を受けた。彼の考えの中心は，一貫して地域コミュニティだった。ULR クラブは，CND 運動と密につながっていたので，ジョージもそこから反核運動に関わるようになった。彼とは，CND の運動のあり方について，幾度も長い議論を交わした。彼は，直接行動を主張し，オルダーマストン行進にとどまるのではなく，トラファルガー広場に座り込み，幾度も逮捕された。ジョージは自分の考えを押し進め，周囲とはうまくやっていくことができなかった。それでも，さまざまな人に声をかけ前向きだった。彼の発想は革新的で，彼がいなければその運動は始まらない，何か本質的なものがあった。キャラバン・ワークショップにしても，これまでのデモ行進や座り込みとも違い，自分たちが地方へ行き人々との対話のなかで CND の活動を地域コミュニティに持ち込む素晴らしい方法だった。

CND の活動から離れ，ノッティングヒルのコミュニティ活動に専念するようになってからも，ジョージは連絡をくれた。人や組織を自分の思い通りに動かそうとして，周囲とぶつかり次々と問題を引き起こしているようだったが，彼はそうした話を私にはあまりしなかった。ジョージにとって私たちは大学の知識人だった。キャラバン・ワークショップやコミュニティ活動の実践的な問題については，他の活動家たちと話し，私とは，今，起きつつある事態の認識について議論をした。党政治は終わったのか，左翼とは何か，といったことだ。私は，新しいかたちの，独立した左翼政治のあり方を模索していた。彼もまた，新しいかたちの，ラディカルなコミュニティ政治を模索していた。こうした問題について，私たちは，長い間，議論を続けてきた。彼は，実践においてはラディカルだったが，思想的には極左ではなく，また階級分析にもそれほど関心をもたず，マルキストでもなかった。

私が，バーミンガムへ移ってからは，ジョージ・クラークと会う機会はあまりなかったが，ジョージから求められれば，彼が企画するプロジェクトや活動に名前を貸した。しかし，実際には，私がそれに関わることはなかった。」

マイケル X らにとっての “Confidential Uncle”

スチュアート・ホールはまた，1950年代に，ULR クラブに現れ，その後，ホールと交流があった「もう一人の人物」についても話してくれた。トリニダード・トバゴ出身のマイケル・デ・フレイタス（Michael de Freitas: 1933-1975）[11] である。ホールの話を要約すると次のような内容である。

「ジョージとはまた別の話だが，マイケルXも ULR クラブにやってきた。彼は，ノッティングヒルで我々を見かけるようになった，と言って話しかけてきた。

そして『私もノッティングヒルで働いているよ』『どんな仕事？』『住宅関係だよ』，といった会話をした。彼は，ラックマンに雇われた人々の元で働いていると言った。『家賃を払わない黒人たちを追い出すのが自分の仕事だ，そんなことしたくないけれど，それが私の生活だ，他に何ができるっていうんだ。』そんなふうにして彼と話すようになった。

マイケルは，最初はそれほど政治的な人間ではなかった。どうして政治的な活動にはまり込んでいったかというと，黒人の運動について今，起きていることをうまくメディアに話すことができる人が他にいなかったからだと思う。メディア関係者はいつも，『マイケル，ノッティングヒルでは何が起きているんだい？』と尋ねていた。彼は，テレビやラジオや，新聞記者にとって，黒人たちの運動を伝えるスポークスマンになっていった。そして，自分の政治集団を組織し，ある日，私に手紙をくれた。『その政治グループは，RAAS と呼ばれているんだ。R-A-A-S。ジャマイカの言葉（Jamaican patois）じゃ，卑猥な表現[12]だ。一般の英語話者には分からないだろうけどね。“自分は RAAS に属している”とか言うわけさ，強烈なジョークだね。ところで，よければ，あなたには外務大臣でもやってもらおうかと思うけれど。』私はこう言った。『いいよ，マイケル，お気に召すままに』と。

そんなふうにたくさんの人が出入りし，彼らと議論した。私は，そうした人々にとっては，信頼できる叔父さん（confidential uncle）みたいなものだった。じゃあ，スチュアートと話してみて，彼の考えを聞いてみよう，といったところだ。」

スチュアート・ホールは，求められれば彼らと会い，話し，理解しようとした。そこには，対話の相手の立場に寄り添い人々の言葉に興味深く耳を傾けるホールの態度にたいする信頼があったのだろう。ULR クラブ，あるいは当時のノッティングヒルとは，普段の仕事や暮らしのなかでは関わりをもたない異なる階層，出身，職種の人々がつながりうる場所でもあった。ジョージ・クラークもノッティングヒルにおいて活動するようになってからは，マイケル X とはいろいろな接点をもつことになる[13]。

多様な文化がぶつかり合う場所

マイケル X との交流について話題になった後，私はホールに，1960年代のノッティングヒルをどのように見ていたのかについて尋ねた。次のような説明が返ってきた。

「政治の動きを分析する者にとっては，ノッティングヒル暴動は，イギリスの政治に人種問題が入り込む重要な局面だった。また，ノッティングヒルには，テディーボーイのような白人の若者も集まり，イギリスの若者の不安，緊張をあらわし，暴力も蔓延していた。グラムシがいう多様な異なる要素が結合する特定の状況（conjuncture）にあった。私はしかし，CND や労働党にも関心をもち，『ニュー・レフト・レヴュー』の編集に携わり，そして現代文化研究センターへ移ったので，私がノッティングヒルに深く関わることはなかった。」

さらに私がスチュアート・ホールに，「マイケル X や彼をとりまくメディアとの関わりも含めて，ノッティングヒルは，新しい文化を生み出す場所でもあったのではないか。ジョン・ホプキンズといった当時のカウンターカルチャーの担い手たちも，ノッティングヒルに集まってきた」と言うと，ホールは次のように話を続けた。

「ノッティングヒルはロンドンの中心部にあり，メディアがより扱いやすい場所であったことは確かだが，その文化について興味深いのは，クラブやバンドなどイギリスにおける黒人文化が生み出されていったことだ。また，68年以降にいわゆるカウンターカルチャーと呼ばれるものの拠点（hub）にもなっていった。それがなぜ起きえたのかというと，ノッティングヒルが，まさに異なるものが混じり合う移行地帯（transitional zone）[14]にあったからだ。ミドルクラスの住宅もあれば，白人のワーキングクラスも住んでいる。アイルランド出身者も多数集まり，旧植民地からの移民も入り込み，異なる文化，年齢，階級がぶつかり合い，絡み合い，結合し，そうした状況のなかでノッティングヒルは対抗文化のある種のセンターとなっていった。」

インタビューの最後にスチュアート・ホールに「1960年代のノッティングヒルについて，総合的にまとめた研究がないのはなぜか」と尋ねた。労働と生活のためにそこに居をおくさまざまな住民たちが持ち込む多様な要素，ストリートやクラブの黒人たちの文化，カウンターカルチャーの展開，若き活動家たちのコミュニティ活動における実験的な試み，などが分断されずに交錯し影響しあう60年代のノッティングヒルの複雑な状況をどう捉えることができるのか。それはまさに政治と文化の問題を扱ってきたカルチュラル・スタディーズのテーマである。ノッティングヒルを描くことができるのは，その場所にいた当事者や活動家たちの「内側」からの視点からか，あるいは，自身もジャマイカ

出身で移民として同時代を生き，ノッティングヒルに何らかのかたちで関わったスチュアート・ホールその人ではないか。

ホールは，自分がノッティングヒルに関する本を書くことはないと言い，話を続けた。

「ノッティングヒルの全てを１冊の本にまとめることは，どんな場合でも，難しい。それは，あなたが日本人であり，英語ネイティブではないといったこととは別の問題だ。60年代のノッティングヒルには，互いにあまりにも異なるさまざまな側面がある。デーヴィッド・メーソン[15]が書けばメイソンのノッティングヒルがそこにあり，マイケル・デ・フレイタスであっても，ジョン・オマリーであっても，それぞれが思い描く本ができあがるだろう。私がノッティングヒルに関わったのは一瞬であり一局面しか見ていない。私がノッティングヒルについての本を書くことはないが，そのテーマが，ジョージ・クラークであっても，黒人文化やマイケルＸについて，教会について，労働党についてであっても，その何かを形にするだけで20年かかる。」

ジョージ・クラークを追って1960年代のノッティングヒルについての調査研究に足を踏み入れ，当時の活動家たちのさまざまな言葉に揺さぶられ戸惑う私に，ホールはこう伝えたいのだと思った。「どのような角度から対象を見るのか，自分のパースペクティブ（切り口）がなければ，ノッティングヒルを（社会を）とらえることはできない。」インタビューの終わりに，私がそう感想を述べると，ホールは，「そう，それが，私があなたに言いたかったことだ」と応えた。あなたの視点と方法論は何か。スチュアート・ホールからの問については４で論ずる。

3 新しい政治と社会運動への模索

2011年に行ったこのインタビューを，陳光興が1992年に台湾で行ったスチュアート・ホールへのインタビューと合わせて読むと，ホールが，当時のノッティングヒルをどのようにとらえていたのか，より明確になる。インタビューの英語原文は，Hall（1996：484-503）に収められているが，これを参照しながら，下記では『思想』1996年１月号に掲載された小笠原博毅訳「あるディアスポラ的知識人の形成」（pp. 6-30）から抜粋，引用する。重要な単語については，私が原文英語を括弧内に入れた。このインタビューは，訳者解題（pp. 6-7）にあるようにジャマイカ生まれのホールの生い立ちからイギリスへの留学，その後からインタビュー時点までの多岐にわたる研究生活について語っている。そこで「ニュー・レフトの契機」（Moments of the New Left）において，ノッティングヒルと ULR クラブについて言及している。

ホール「1958年のノッティングヒルでの人種騒乱の時には，ニュー・レフトの人種に関する活動が実際に組織され，住民の連帯や，黒人支持の団体が組織されました。私たちは，『ユニバーシティーズ・アンド・レフト・レヴュー』とニュー・レフト・クラブを設立したのですが，ある時期には26ものクラブができたものです。そこには労働党員，労働組合員，学生などがいました。つまり知識人だけではなかったのです。…それから私たちは反核運動の CND と密接なつながりを持ちました。CND や平和運動との連係は，私たちの運動が，ただの階級運動ではなく，いわゆる『新しい社会運動』の黎明期のものの一つと深く関わっていたということを示しています。私たちは，1968年以後に『新しい政治』（new politics）となるものの最前線にいたのです。」（小笠原訳1996：19-20）

スチュアート・ホールにとって，ニュー・レフトの活動の始まりは，これまでの階級運動とは異なる，より幅の広い大衆を含む新しい運動の流れにあり，政党の初期形態というよりも新しい社会運動により近いものであり，反-組織的で，「先駆的な」68年の精神だった。また，1960年代には，「伝統的な諸階級の間を移行する人々（transition between traditional classes）が大勢現われ」（同訳：20），ニュー・レフトの活動に関わったとして，ホールは次にように述べている。

ホール「労働者階級の出自を持った若者が，奨学金をもらって，まずカレッジやアート・スクールに行くようになり，専門職を得たり先生になったりし始めます。ニュー・レフトというのは，階級間を自ら移動していく人々と密接につながっていきました。私たちのクラブの多くは，手工業職人を親に持ち，しかし自分たちはよりよい教育を受けて大学へ行き，教師として戻ってくるような人々のたくさんいるニュー・タウンにありました。」（同上：20）

上記のインタビューの内容をふまえて，2011年のスチュアート・ホールからのメールとインタビューを読むと，ホールが，ジョージ・クラークのどのような面に注目していたのかがよくわかる。クラークは，初期のニュー・レフトの活動が手探りで展開していた「新しい政治」の動きを，コミュニティという場において実践する「先駆者」であった。クラークは，従来の権威的，組織的な政党政治や理念的な「階級」闘争の概

念にとらわれず直接行動を重視した。CND の活動においては地方を巡回し人々と対話し，ノッティングヒルにおいては地域内外の多様な人々を巻きこんだコミュニティ活動を展開した。

イギリスと旧植民地を含む他国との関係，経済体制の変容，人の地理的な移動，階級間の移動などによるグローバルな状況の変化のもとで，ニュー・レフトが登場する土壌ができた。そして60年代のノッティングヒルは，第二次世界大戦後のイギリス社会の政治，経済，文化の軋轢を象徴するような場所であり，ミドルクラスとワーキングクラスが入り交じり，国内外からの移民が身を寄せ，階級間を移動する若者たちもこの場所に集まってきた。多様な文化が接触し反応し新たな文化を生み出す特定の状況だからこそ，ノッティングヒルは，さまざまな志をもつ人々を引き寄せる磁場となり，従来のやり方にとらわれない発想を試みることができた。

それでは，さまざまな志をもってノッティングヒルに集まった人々は，この状況にいかにして関わろうとしたのだろうか。住民たちをまとめる既存の集団や組織，意識があるわけではない。どうやって住民に働きかけ，そこに関わる人々同士がつながり，地域に関係をつくっていったのか。この問題は，2000年代のロンドン，ハマースミスにおいて私が調査をしてきたテーマでもある。つまり，多様な人々が集まり移動する都市空間において，新旧の住民を含んだ「地域」をどのように創り出すのか（西川 2009，2010a）。私がハマースミスにおいて調査した有志住民からなるレジデント・アソシエーション（2000年結成）の場合は，インターネットを利用した住民間の情報ネットワークの形成や，地域における諸プロジェクトのプロセスの共有と成果の可視化（落書き消し運動，植樹，ネイバーフッド・ワッチングなど）により，加入者を増やしていった。1960年代のノッティングヒルにおいては，その場所に暮らす人々，関わる人々の出身も文化も多様で大きく変化するなかで，地域外部からも注目を集めさまざまな種類の活動が試みられた。こうした状況において，他人同士がどのように働きかけ，住民活動を展開したのか。

4 研究の視座と方法

4-1 何を媒体とするのか―メディア戦略

取材を重ねるなかで，1960年代のノッティングヒルにおけるコミュニティ活動を知るうえで私が注目するようになったのは，人と人，情報，場所をつなぐ「媒体」，とくに，マスメディアと，それとは目的を異にするオルタナティブ・メディアの使い方である。元活動家たちは，マスメディアによる報道の恣意性や情報収集の不十分さを批判しながらも，自分たちの活動を対外的にアピールする手段として新聞や雑誌，ラジオ，後にはテレビといったマスメディアを意識して利用していた。しかし，こうしたメディアがどれほど広範囲にニュースを報道することができたとしても，そこに住んでいる人々に，伝えたい情報が届き，知りたい情報が得られるわけではない。私が取材をした人々は，大きなメディアに依存するのではなく，「自分たちの声」を身近に伝えあう独自の媒体，ネットワークを作り出していた。実際に60年代後半から70年代にかけてのノッティングヒルでは，多様なニューズレターが随時に発行され，ポスターが作られ，住民にフライヤーが配られた。また，こうした紙媒体と口コミと電話などの通信機器を使い地域内外に休む事なくメッセージを発信していた。

ノッティングヒルにおける数えきれない地域活動を，人々に働きかける活動家（アクター）のメディア戦略に注目してとらえていきたい。そう考えるようになったのもまた，ジョージ・クラークに翻弄されたおかげである。そもそも私が，故人であるクラークを追うことができたのは，図書館やインターネット検索を利用して，『ガーディアン』や『タイムズ』といったイギリスの全国紙や雑誌，あるいは書籍において，クラークに関する記事を見つけることができたからだ。また，『ケンジントン・ニュース』 や『ケンジントン・ポスト』といった地方新聞の記事においても，全国紙以上に頻繁にジョージ・クラークの名前を目にした。ケンジントン中央図書館で，地方紙のマイクロフィルムを回していると，ジョージ・クラークの写真が繰り返し現われ，彼が地元の新聞をしばしば賑わせていたことがわかる。また，クラークがノッティングヒルにおいて生活，活動拠点にしていたゴルボーン区（Golborne Ward）では，1970年代初めから「ザ・ゴルボーン」（The Golborne，図 3 ）というニューズレターを，その時々に彼が関わっているグループ名で，実際には彼が執筆，編集して毎週のように，必要があれば随時に発行し，地域に配布していた。クラークが作成したプロジェクト資料は，図書館のアーカイブにあるだけでなく，取材した人々からも見せてもらった。クラークの友人であるメイソンの話では，ジョージは多弁であるだけでなく，夜中，タイプライターを打ち，「書き

The Golborne

Special issue　May 1971 Social Rights Committee 57 Addison Road London W10　telephone 960 7830

ALL POWER TO THE PEOPLE

THE NEIGHBOURHOOD COUNCIL: members pose after the first meeting – with friends

図３　The Golborne, May, 1971

まくっていた」という。

ジョージ・クラークの場合は，情報を発信するだけでなく，自分を演出する手段としてマスメディアを積極的に利用していた。時には，クラークの「主張」がそのまま報道され，ジャーナリストが事実を確認せずに記事を書くこともあったのだろう。西川2007においては，ジョージ・クラークについて，メイソンの話と『タイムズ』の記事を組み合わせて，次のように書いた（西川 2007：51-52）。

「…ジョージはまさに街頭演説家で，どこにいても演説を始めた。パブでも数杯のウィスキーを飲みながら立ち上がって話をする。問題は，演説があまりにも長いことだ。いったん話し始めると自分ではコントロールができなくなった」（メイソン談）。ある新聞記事によると，クラークは「６フィートの迫力のある長身で，言葉巧みに話し宣伝に関しては天賦の才能があった」（*The Times,* 6 May, 1969, p. 10）。長身の大男が，パブでも街頭でも広場の演説台においても突然に立ち上がってえんえんと話す。雄弁ではあったが，しかし，クラークは自分の出身や過去について一切語らなかった。「クラークの友人でもあり，彼を尊敬していた『タイムズ』のジャーナリストが，クラークの生涯について調べようとしたが，30歳以前の彼に関する情報を得ることはできなかったという」（Mason 手紙2007）。

私は，当時の新聞記事とメイソンの話を重ねて，長身の大男が演説する様子を思い描いていた。別の雑誌（*Observer Magazine,* August 26, 1973：16-17）には，ジョージ・クラークが他の２人の男性活動家と立ち並ぶ写真が掲載されており，そこではクラークは長身に写っていた。ところが，2008年にオマリー夫妻に会うと，ジャンは呆れたように笑い，ジョージ・クラークは自分より背が低かったと話し，彼が写っている別の写真を見せてくれた。「新聞記事だからといって，取材して確認したうえで書いているとは限らない」と注意してくれた。私はようやく，雑誌記事のその写真は，クラークが他の男性たちよりも背が高く見えるアングルから撮らせていることに気づいた（西川 2010b：123-124）。

当時作成された新聞記事や集会の議事録やニューズレターなどを読み，それらに関係する人々と会うことによって，「何が事実であるか」という問題とは別に，各記事や記録は，当たり前のことではあるが，誰に向けて何を伝えたいのかによって，またどのような媒体を利用するかにより，内容も表現も，使い分けられているということを思い知ることになった。

マスメディアをとおした演出とは逆に，外部に発信するつもりがない事務的な議事録に，それに関わった人々の性格や場の雰囲気がよく現れている場合もある。ケンジントン中央図書館で見つけた1966年のロンドン・フリー・スクール（LFS）の議事録は，参加者の名前と発言を丁寧に記している[16]。これは，LFS の主宰者の一人であるジョン・ホプキンズが作成したものである。彼はまた，地域の住民に向けた「ザ・グローブ」（The Grove，図４）というニューズレターを編集，発行し LFS の活動を紹介している。私は長いあいだ，この議事録の作成者が，ロンドンのアンダーグラウンド・カルチャーの数々のシーンを作ってきた通称ホッピーと同一人物だとは気づかなかった。ホッピーは，スチュアート・ホールがいう1960 年代の（アメリカ的）カウンターカルチャーを象徴するような人物であり，彼が雑誌や映像メディアに登場するときは，サイケデリックな色彩の服装に繊細な出で立ちのヒッピー風アーティストというイメージ[17]があった。映像や写真集，書籍から受け取るホッピーの印象と議事進行の様子を淡々と書き綴った記録とが，ジョン・ホプキンズその人に実際に会うまでは私のなかでなかなか一致しなかった。しかし，当時の一次資料を手にとって見ることによって，ホッピーが行き当たりばったりの勢いで後世に語り継がれる「ハプニング」を仕掛けていったのではなく，彼をはじめとした関係者たちが，会場や日時の調整，機材の手配など実務的な作業や次々とふりかかる問題に対処しながら，さまざまな人をつなぐ場面を一つ一つ作り出してきたことを，残された書類から感じ取ることができた。

THE GROVE

nottinghill neighbourhood newsletter

6d

LONDON, MONDAY 23 MAY 66.

THE GROVE is for the people of Notting Hill. It is a local newsletter, a place where people can air their views—and their talents. It is also a carrier of information. Do you want to know where the nearest playgroup is for your child? Do you want to play music with others in the district? Have you got a spare room you want to let? Can you get a rent reduction? Inside, you may not find the answers, but you may find out how to get the answers.

In turn, the GROVE would like to hear from YOU. What's happening over there? Where's the next Blues Dance? Have you a poem you'd like printed? What changes would you like to see to improve the GROVE. Write to us at 26, Powis Terrace, W11 with your views and comments. And thanks for your interest.

in this issue

HOUSING GROUP
MRS M & MRS L
DIARY OF COMING EVENTS
LONDON FREE SCHOOL
NORTH KENSINGTON FAMILY STUDY

VOL 1 NO 4

PUBLISHED BY LONDON FREE SCHOOL 26 POWIS TERRACE W11

MUHAMMED ALI VISITS W11

World Heavyweight Champion Muhammed Ali paid what was supposed to be a private visit to the Play Group of the London Free School at 3pm last Sunday.

But for the entire neighbourhood it was one of those days when there was something in the air from first thing in the morning. Maybe it was the steady flow of well-washed children into 34, Tavistock Crescent, maybe it was the dozen or so determined looking helpers who dutifully gathered to make sure that no harm came to the great man.

Whatever it was, Muhammed Ali had been in the house for only ten minutes and the street was blocked with expectant people. What a Sunday afternoon! The newspapers, blame them, had also heard and the cameramen waited impatiently.

Inside, Muhammed gently sat down on the floor and talked with the children, signing countless autographs. Half an hour passed quickly, and pretty dreamers got crumpled, carefully brushed hair wildly

CONTINUED on centre page.

A very fairous than twelve fifty young face, in the sitting room of Mrs Laslett, seen in our photo peeking about in the background. Photograph by LFS Photographic Group.

mrs M&mrs L

michael de freitas

From Mrs May McGrath's house on Tavistock Rd to Mrs Simonne Laslett's on Tavistock Crescent is a very short walk indeed. Walking at the brisknest of paces the fastest man in the world could not shed an ounce of fat on that journey, but he will find that not only would he have entered a different street but a different world.

May, as I call her quite affectionately, has been a friend of mine for longer than I can remember. She was born, I believe, on Irish Catholic. Today she is studying Islam—never strong allthem that smile in the Ghetto have I seen a person so

CONTINUED on back page, column 1.

図４　The Grove, May 23, 1966

PEOPLE'S NEWS 1p

Vol. No.26 7th August, 1972

COUNCILLORS ON THE RUN

The scene of the LOCK-IN

Confusion reigns

Clark Methven Eaton

図５　People's News, August 7, 1972

ノッティングヒルに拠点をおき，より多くの住民組織や個人を巻き込んだ媒体として興味深いのが，ノッティングヒル・プレス（Notting Hill Press）である。1968年，ベリル・フォスター（Beryl Foster）[18] とリンダ・ゲイン（Linda Gane）は，看護学校を退学し，借金をして１台の印刷機を調達し，男性たちにまじって講習を受け，自分たちの印刷所を開設した。これによって，地域の人々が低料金で印刷することができるようになった。たとえば，ピーポーズ・ニュース（People's News，図５）は，1969年１月から1973年半ばまで毎週発行された情報紙である。地域に拠点をおく複数の住民組織[19] が共同で作成し，住宅問題や遊び場問題などについてのさまざまな主張を，１枚のシート表裏に掲載した。毎日曜日の夜，異なるグループの関係者がネタを持ち寄り議論しながら記事をタイプし，翌朝には印刷したてのニュースを配布する。発行枚数は毎週300～500枚，その半分はそれぞれのワーキング・グループが一束ずつ持ち帰り，１枚１ペンスで売った。また街頭に立って販売することは自分たちの活動の宣伝にもなった。（O'Malley 1977: 70）

2006年夏，ベリル・フォスターがハマースミスのグローブ・ネイバーフッド・センター（GNC）に立ち寄った際に，私は偶然にもそこに居合わせ，彼女と立ち話をした。その時は，フォスターが60年代にノッティングヒル・プレスを立ち上げた人物であるとは知らなかったのだが，その後，フォスターからの紹介によって60年代のノッティングヒルにおける活動家たちに会うことになった（西川 2010b: 157）。フォスターは，2007年９月のインタビューのなかでこのように話している。「ノッティングヒル・プレスでは，毎週日曜日の夜は，ピーポーズ・ニュースの印刷を最優先させた。日曜の夜になると関係者たちがコミュニティ・ワークショップの部屋に集まり，掲載したい話題を持ち寄った。話し合いながら，すぐにタイプを打ち始め，PEOPLE'S NEWS のタイトルだけ既に印刷されたシートに，毎週の記事を埋めていく。夜中に印刷して，一束ずつまとめて協力者の家のドアに放りこんでおくと，それぞれのストリートに配布してくれる。一晩で，とくかく迅速に記事を作り，印刷，配布し，人々の手に渡るようにした。」

1958年の人種暴動後，60年代にかけて多数の活動家が集まり，とくに60年代後半から70年代にかけてノッティングヒルに拠点をおいた地域活動を展開してゆく。そこでピーポーズ・ニュースをはじめとした，数々の地域メディアが作られた。これらは，フォスターの話からもわかるように，情報発信の手段であるだけでなく，メディアを創るという行為とその現場が，複数の団体が集まる地域のフォーラムとなっていた。1960年代から70年代にかけてのノッティグヒルにおいて，草の根のメディアが，今日以上に地域内外の人と情報と場所をつなぐコミュニケーションの手段として機能していたのではないかと思う。

4-2 メディア実践から考える―「場の作り方」

2010年９月から私は在外研究の機会をえて１年間，アメリカ，イリノイ州に滞在した。1960年代のノッティ

ングヒル関連の取材をとおして，そこでの活動が同時代のアメリカの公民権運動や草の根の運動，カウンターカルチャーなどからの影響を受けていることに気づき[20]，アメリカという場所から，自分のこれまでのロンドンにおける調査研究を見つめ直そうと考えた。アパートを借りたアーバナ市のダウンタンに UCIMC（Urbana Champaign Independent Media Center）という NPO のメディア＆アート・センターがあることを知り，会員となった。半年後には，そこで運営されているコミュニティラジオ局で日本語番組，Harukana Show を始めた。毎週１時間のラジオ番組をつくりながらメディアと地域の住民組織やその活動について学ぶという，これまでとは異なる実践的なフィールドワークの機会を得た（西川 2012）。

日本へ戻った後も，インターネットを利用し日米在住のスタッフとともに今日まで番組制作を続けている。一定の割合の住民が毎年入れ替わる大学街において，こうした地域を拠点におくグループ活動の継続がいかに難しいかを，コミュニティラジオ番組制作を通して痛感している（西川 2014c）[21]。また地域で行われている移民問題などを扱う運動を見ていると，たとえ通信技術が発達し個人が高速に大量の情報を送受信できるようになっても，そこから人と場所をつなぎ，住民間の対面的な関係をつくることは容易ではないことに気づく。ましてや，地域における活動を全国的な運動と連携させていくには，そのための「仕掛け」や活動を持続させる「仕組み」がいることを，アメリカでの実地調査の現場から垣間みることができた（西川 2013b, 2014a）。

こうしたメディア実践を経験するなかで，スチュアート・ホールへのインタビューからの問いをもう一度考え始めた。どのような視座と方法で，60年代のノッティングヒルを見てゆくのか。私は，住民に働きかけるアクターたちのアプローチの方法を，「メディア戦略」だけでなく，地域における「場の作り方」，また活動を展開するための「地域外との連携」，という３つの側面に注目して見ていきたいと考えている。「外部との連携」とは，自分たちの活動を地域内外に発信し，周辺地域や，全国，あるいは世界的な動きと連携しながら，地域における活動を活性化し，場合によってはより大きな社会運動へとつなげていくことである。これは「メディア戦略」と重ねて見てゆくことができるのではないかと思う。

実際の地域活動において現実的に重要となるのは，情報を伝えることにとどまらず，そこから人の動き作りだすことである。そのための「場の作り方」に関しては，60年代のノッティングヒルに関する資料調査と取材をとおして，３つの取り組み方に注目している。

第１は，「単位としてのコミュニティ」を設定する。これはジョージ・クラークの活動の方法論でもある[22]。住民構成が多様で流動的な地域において，とりあえず，地理的な範囲を基盤にしたコミュニティの枠を設定し，そこから活動を始める。活動の目的に応じて，コミュニティの範囲は適当に設定しうる。それがゴルボーン区のような，最小の行政区（Ward）の場合もあれば，ノッティングヒルという名称を用い，より広い地域をさす場合もある。コミュニティの規模は，たとえばネイバーフッド・カウンシルを結成する場合は，人口が１万人を超えない程度にするなど，とりあえずの境界や規模を想定し，そこでさまざまな活動を展開し住民としての意識を培う。

コミュニティとは，条件や境界を強調することによって排他的な単位となりうるが，ジョージ・クラークの場合は，人種，宗教，階層，ジェンダーを問わないことにより，境界の内外からも多くの人々が参加し，また協力を促すことが可能であった。その一方で，クラークは自分が提案した企画や組織ににおいて代表者を名乗り，実際の活動を牛耳ろうとしては，彼自身がその集団から排除されるという皮肉な結果を繰り返している。ジョージ・クラークの理念と現実とのあいだの滑稽にも見える矛盾は，しかし，「コミュニティ」というものがもつ特性をよく表している。コミュニティとは，理念的には成員間の平等性を唱えることができるが，場合によっては求心的かつ排他的な集団となりえ，単位として統制されやすい側面も合わせもつ。60年代から半世紀をへた今日においては，「コミュニティ」とは，行政，商業，宗教に至るまで様々な分野で使われる用語となっているが，その現代的な意味を，ジョージ・クラークの「先駆的な」活動をとおして改めて考えることができるのではないか。

第２は，「情報ネットワークの形成とイベント開催」型である。第１のタイプとは対照的に，組織や集団の継続，アイデンティティの形成それ自体を目的とするものではなく，あるアイディアに共感する人々が，資金，知恵，経験，労力を出し合い，さまざまな形で協力してイベントや活動を実施する。参加者の相互作用による偶発性を創造的に活かす「ハプニング」を１つのキーワードとし，そこで生まれた出会いや成果をシェアし，参加者がそれぞれに自分の次の活動へと活かしていく。たとえば，ジョン・ホプキンズが関わった

1960年代の活動は，多彩なイベントを打ち上げることにより人が人を呼びその輪を広げていった。ノッティングヒルにおけるロンドン・フリー・スクールの場合は，地元住民の他に地域外からアーティストや研究者など多様な人々が参加[23]し，関係者の人脈を活かしたイベントを実施した。たとえば，ボクシングの世界ヘビー級チャンピョンのモハメッド・アリがLFSを訪問し，LFS運営資金を募るために，ピンク・フロイドが教会でコンサートを開催，地域住民が主体となるカーニバルを路上で実施し，これは後に世界的に有名になるノッティングヒル・カーニバルへと展開することになる。

ジョン・ホプキンズや関係者たちは，場合によっては，マスメディア（新聞，雑誌）を利用した情報宣伝活動を行うが，その一方で，60年代のイギリスにおけるカウンターカルチャーを代表する新聞，IT（*International Times*）の発行や，UFOクラブ（ライブハウス）設立など自分たちの表現，情報発信媒体や場所を作り出していった。ホプキンズはまた，地域に配布するためのLFSニューズレター作りも引き受けた。ホプキンズと話していると，新しい企画を次々と立ち上げ，実施するには，国内外の社会情勢や音楽や文学やアートについて最新の情報を得るネットワークをもち，かつ人と場所をいかにつなぐかについて実践的に考えるある種のマーケティング・センスが必要であることに気づく[24]。カウンターカルチャーというものが時代のアウトサイダーではなく，後から振り返ると一定数の消費者のニーズを先取りし，実験的にこれを実施するという側面もあったのではないかと思う。

第3は，「当時者としての問題の共有と解決への取り組み」である。そこでは，住民たちが，自分たちが抱える問題を認識しその解決に向けて具体的に対策をねる。ベリル・フォスターやジャン＆ジョン・オマリーたちが関わったような，ピーポーズ・アソシエーションや，プレースペース・グループなどの活動である。住宅や子供たちの遊び場確保など，暮らしのなかで住民にとって差し迫った問題について，住民間の情報交換を密に行い議論を重ね，行政へ抗議，あるいは交渉し具体的な解決策を探る。地域の教会などで毎週，集会を開き，ニューズレターを定期的に発行し，住民が誰でもいつでも参加できる開かれた運動のかたちを試みた。多様な人々がいて，さまざまな現状があるとしても，それらを個々人の問題として片付けるのではなく社会の問題として認識するまでには，繰り返しそれを問題化し丁寧に伝える言葉と媒体が必要となる。研究者が使う分析用語やさまざまな理念を語る抽象的な表現にたいして，そこからは多くの現状がこぼれおちてしまうといういらだちと批判を，元活動家たちへの現代におけるインタビューからも感じる。

また，住宅問題や遊び場の問題は，目に見え人々のあいだで共有しやすいが，たとえば家庭内暴力のような，活動に携わる人々のあいだでも，日常生活のなかに内面化している「政治」について取り上げることは容易ではない。生活の当事者として問題を共有し取り組む活動は，現場に深く根ざしているが，それは必ずしもノッティングヒルに限ったことでも，そこで解決しうる問題でもない。私が話を聞いた活動家の多くは，70年代にはノッティングヒルを離れ，それぞれの問題意識を別のかたちで追求した活動を継続している。

以上の3つのタイプは，ノッティングヒルにおいて行われたコミュニティ活動を網羅したうえでの分類ではない。これまでのロンドン調査で得た情報を，私が英米国の実地調査において見てきた今日の住民活動やメディア実践を参考にしながら，整理したものである。そこに登場するアクターたちは，自分たちの活動に主軸を置きながらも他のタイプの取り組みにも関わり，実際にはそれらが区別されずに同時進行していた。だからこそ，とりあえず3タイプに注目して，これまでの取材とドキュメント調査をまとめ，そこで分類しえない現状をとらえたいと考えている。

また，本研究は最終的には，60年代のノッティングヒルという場所での出来事を再構成することを目的とするものではない。人，もの，情報のグローバル化が進行し，大量の情報が氾濫する時代に，場所に拠点をおく活動において，多様な背景を持つ住民たちが，どのようにメディアを利用し他者同士が集う「場」を作り出し，人と人との関係を生み出すのか，その仕組みをとらえ，多様性に開かれた地域作りやつながり方の可能性を探る思考の場として，60年代のノッティングヒルや，現代のロンドンやイリノイでの地域活動をとらえ描いていきたい。「人と人が対面的に出会う場」をどのように設定するかは，今日の住民活動，運動作りと共通する課題であり，60年代から現代社会をみる視点となりうるだろう。

お　わ　り　に

本研究はまた，*'Grassroots Media Zine'*（GMZ）という個人出版の小冊子の形で随時にまとめる予定である。学会誌や商業雑誌とは異なり流通範囲が限定されるが，

制作者の意図にそって言語，文体，内容，レイアウトを選ぶことができる。また，Zine という手にとることができる形にすることによって，調査協力者との具体的な対話を可能にする（Garza 2014: 1-2）。GMZ, vol. 2 では，本稿の前半で述べたような私の研究調査の経緯，ジョージ・クラークへの関心，スチュアート・ホールへのインタビューを中心に掲載した。そこでは，筆者でありかつ物語の主人公である「私」は，ジョージ・クラークの亡霊を追って60年代のノッティングヒルを旅する文化人類学者という設定になっている（西川 2014b）。

この Zine の草稿を，2014年９月に調査協力者に送り，渡英して一人一人と会い，各自の取材内容を GMZ に掲載してよいか許可を得るとともに，多数のコメントをいただいた。そこには，「なぜ，ジョージ・クラークのようなどうしようもない人物を扱うのか」という批判の声もあった。この論文ではそれに応え私なりの視点を説明しようと試みた。また，「人類学者は，すぐにリーダーを決めたがる」という声も聞かれた。私が，ジョージ・クラークが残した文書をもとに，彼が諸プロジェクトの統括者であるかのように紹介することにたいする批判である。実際にその活動に携わった人々は，クラークの意図とは別に，特定の人物がリーダーシップをとるのではない集団のあり方や組織運営を試みていたが，そうした「状況」は文書には残りにくい。調査を英語の報告書にして様々な人々に読んでもらうことにより，現状認識の齟齬が浮き彫りになる。また，これを物語化することによって，そこに登場する「私」への批判を述べやすくなる。私がフィールドワークをしているのは，ノッティングヒルそのものではなく，60年代のノッティングヒルをめぐる記憶であり，逆説的ではあるが，ここでは，物語がフィールドワークのひとつの現場となるのである。

謝辞

2001年からのロンドンでの地域コミュニティに関する調査と2011年からのイリノイ州でのメディア実践と実地調査においては，長年にわたって多数の方々からの協力を得ています。あまりにも長い試行錯誤の研究状況を見守り叱咤激励し支えてくださった方々に，心より感謝いたします。全てのお名前をあげることはできませんが，「自分の視点から書くこと」を励ましてくださった Prof. Stuart Hall と，故人のインタビューの掲載を快諾してくださった Prof. Catherine Hall のお名前を記させてください。また John Hopkins 氏は，私がアメリカでラジオ番組を担当するときに背中を押してくれました。この論文の校正中に，彼の訃報を知りました。ホール氏，ホプキンズ氏との約束をいまだ果たせていませんが，ようやく始まりを書くことができました。

注

1）Notting Hill は，ロンドン西部の Royal Borough of Kensington and Chelsea の北部，行政区分は North Kensington であるが，一般的にも，あるいはインタビューのなかでも，ノッティングヒルと呼ばれることが多い。ノース・ケンジントンの行政区分は，区が統合されるなどして境界，名称が変更される（加藤 2004：20-21，32）が，1966年センサスでは，当時のノース・ケンジントン４区（Golborne, Pembridge, Norland , St. Charles）の人口は68,200人，人口密度は134人／acre である（Notting Hill Housing Survice 1969: 13）。本稿では，行政区分として言及が必要な場合は，（基本的には1960年代当時の）ノース・ケンジントンと記し，その他は，ノッティングヒルと記す。

2）1960年代のノッティングヒルにおいて展開された地域の諸活動を，当時の資料では community action, community activities と表現されていることが多い。

3）ジョージ・クラークのオルダーマストン行進，100人委員会設立，トラファルガー広場における座り込みから，キャラバン・ワークショップへ至る経緯は，クラーク自身が詳しく説明している（Clark 1972: 181-185）。

4）ノッティングヒル・サマー・プロジェクトは，1964年にアメリカで行われたMississippi Summer Project からアイディアを得ている（Rustin 1968: 196）。全国から200人の参加者を集め（登録費２ポンド），宿泊所と食事を提供し，ノッティングヒルにおけるさまざまなプロジェクトに参加する，という案がジョージ・クラークから出され始まった。（O'Malley 1997: 43）。

5）クラークが関わった次の活動，組織にもスチュアート・ホールの名前が掲載されている。Notting Hill Summer Project（1967），The Grove Community Trust（1969），The Committee for City Poverty（1972），Notting Hill Seminar（1996），など。また，ジョージ・クラークは，初期のニューレフトの関係者が集まった『メーデー宣言』の編集にも関わっている。1968年出版された『メーデー宣言』第２版の制作には，「ウィリアムズ，トムソン，ホールの共同編集のもとで，多くの執筆者が寄稿した。寄稿者のなかには，数人の若手のニューレフト，たとえば，マイケル・ラスティン，ボブ・ローソン，テリー・イーグルトン，ジョージ・クラークが含まれていた」（Ｌ．チュン著，渡辺訳 1999［1993］：161）。

6）本稿では，1960年代，70年代のノッティングヒルにおける多彩な活動に携わった人々を（元）活動家と呼んでいる。自分たちの生活や地域，社会を改善するために，活動の企画，実行，組織運営する人々をさし，

クラークのように生活のほとんどの時間をそれに費やしていた人もいれば，他に職業をもち地域活動にも深く関わっていた人たちもいる。私が話を聞いた活動家たちは，60年代から70年代にノッティングヒル，あるいはその周辺の賃貸住宅に何年間か住み，集中的に活動に携わり，その後は，転出し，各自の仕事，暮らし，活動のなかで，それぞれの考えを実践している。

7）ジャン＆ジョン・オマリーへのインタビュー（2011年２月18日）より。ジャンは，リバプールのユースCNDのメンバーであった。両親が購読していた *Peace News* にキャラバン・ワークショップについての小さな広告を見つけて申し込み，26人が一台のバスに乗って地方を移動するCNDの活動に４週間参加した。

8）西川2007では，ジョージ・クラークのコミュニティ観とノッティングヒルにおける60年代初期の活動を，Hall 1960と，ノッティングヒルにおいてクラークとしばしば活動をともにしたメソジスト教会牧師デービッド・メイソンへのインタビューをもとにまとめた。

9）John（Hoppy）Hopkinsは，写真家，アーティストとして1960年代のロンドンの対抗文化を先導し，70年代以降は映像制作に携わった。1964年にはバリー・マイルズ（Barry Miles）とともにラブ・ブックス（Love Books）を設立し，アメリカのビート小説をイギリスに紹介した（Wilson 2005: 79）。1965年には，ロイヤル・アルバート・ホールにおいてのアレン・ギンズバークらによる詩の朗読パフォーマンスの企画，運営に携わり7000人あまりの観客を集めた。同年，ノッティングヒルにおいては，ロンドン・フリー・スクール（LFS）を設立，主宰者の一人として運営に携わり，地域内外の活動家，学識者，音楽関係者を集め，住民が参加し伝え学びあう自由な場所と機会を設定し，活動をすすめた。彼のもとにはさまざまなアーティストや活動家が集まり，仲間とともに，ノッティング・ヒル・カーニバルや，イギリスの後にカウンターカルチャーと総称される活動（ex. UFOクラブ，*IT: International Times* の出版）など，時代を先取りする活動を展開した。60年代のノッティングヒルの活動を知るうえで，私の調査においてはキーパーソンの一人であり，何度か話を伺った。

10）“Chapter 4 Interview with Stuart Hall”のインタビュー内容（小見出し）は次のとおりである。The Universities and Left Review/Notting Hill Riots/Oswald Mosely/Campaign for nuclear disarmament and direct action/No politics would happen without him/Essence of George Clark/Controversial, imaginative, innovative, annoying/-Michael X as a kind of spokesman/A transitional zone/Use of different kinds of media

11）Michael de Fraintasは，1957年にイギリスに移住し，ノッティングヒルにおいて悪徳不動産業者として有名なピーター・ラックマン（Peter Rachman）の元で働きながら，同地域の住民組織，カウンターカルチャーの活動に関わり，広い人脈をつくった。1965年に，RAAS（Racial Adjustment Action Society）と呼ばれる過激な黒人政治グループを立ち上げ，そのリーダーとなり，人々からはマルコムＸにちなんでマイケルＸとも呼ばれるようになった。トリニダード・トバゴにおいて殺人罪により死刑となり1975年に没した。スチュアート・ホールは，レス・バックによるインタビュー（2009）のなかで，ノッティングヒルとマイケルＸについて詳しく語っている（栢木訳 2014: xxiv-xxvi）

12）「raas: short for raasclaat＝arse cloth＝sanitary towel，ジャマイカの卑猥な言葉，白人には知られていない」（William, J. L. p. 115）。*“Although the most common expletive in Jamaica,* ***raas****, refers to the anus, the most offensive is the one referring to the menses, blood klaat.”*（Chevannes, ed. 1997: 119）

13）ジョージ・クラークは，ノッティングヒルで活動を始める1950年代の末から，マイケル・デ・フレイタスとの付き合いがある。当時，デ・フレイタスは，クラークたちが住民に働きかけ立ち上げた住民組織のメンバーでもあったが，有名な悪徳不動産業者ラックマンへ情報を横流ししていたことが発覚し，クラークたちは住民組織を解散せざるをえなくなった（O'Malley 1979: 28-29）。こうした問題があった後も，デ・フレイタスとクラークとの付き合いは続いていた。「マイケルＸ」が1971年にトリニダード・トバゴに戻り，1972年２月にゲール・ベンソンの殺人容疑で逮捕されたという報道にたいして，ジョージ・クラークは，地方新聞の取材に応えて，マイケル・デ・フレイタスとの出会いと彼のノッティングヒルにおける活動について語っている（*Kensington News and West London Times,* March 3, 1972）。

14）スチュアート・ホールが2011年インタビューのなかで述べた移行地帯（transitional zone）とは，同心円地帯理論における「推移地帯」（Ｒ．Ｅ．パーク，Ｅ．Ｗ．バーゼス他著，1973［1925］：53）のような都市構造のなかで位置づけているというより，人の地理的移動と階層間移動がもたらす多様な文化接触による社会の緊張と変容をさしているのではないかと思う。

15）デーヴィッド・メイソン（David Mason, 1926-），メソジスト教会牧師。1960年にノッティングヒルのメソジスト教会に着任，複数の牧師とチームを組み，ノッティングヒルの人種差別問題，生活改善に取り組んだ。住民に働きかけ，ノッティングヒル・ソーシャル・カウシルを設立，ユース・クラブなど，多様なプロジェクトを通して地域の問題に取り組んだ。ジョージ・クラークが，ノッティングヒルに転入してからは，ノッティングヒル・サマー・プロジェクト，都市貧困問題委員会など，クラークと協働していくつかのプロジェクトを運営した。1970年代にはノッティングヒルを離れたが，ジョージ・クラークが亡くなるまで，親友として付き合いがあった（西川 2007）。メイソンとは，2003年に初めてインタビューを行って以来，ロンドンへ行くたびに話を伺っている。

16）たとえば，“London Free School meeting 7, 15th Feb 66”の冒頭には，参加者14名の名前がアルファベット順に掲載され，アーティスト，研究者，地元活動家と多彩な人々がLFSに関わったことがわかる。18項目

の議論や報告のなかには，ノッティングヒルの地元のニュースやジョージ・クラークが *'People and Politics'* を発行したことなどが含まれている。議事録の最後には，次回の集会の12議題を注意して目を通しておくようにと記されている。

17）Stephen Gammon 監督『A TECHNICOLOR DREAM』2008 に描かれ登場する John "Hoppy" Hopkins などを参照。

18）ベリル・フォスター（Beryl Foster）は，アイルランド出身，看護師になるべくロンドンへやってきたが，ノッティングヒルにおけるコミュニティ活動にのめり込み，住宅問題などに取り組む地域住民の有志からなる People's Center の活動に関わるようになる。学校を中退し，友人のリンダ・ゲインとともに，1968年に Notting Hill Press を設立。借金をして offset litho machine を購入，男性労働者にまじって講習会を受け使い方を学んだ。ノッティングヒル・プレスは，複数の地域住民組織がその運営を支え，倒産すると別の名前の会社となって営業を続けた。印刷料金を最小限におさえ，地域のさまざまなワーキング・グループの活動を印刷面から支え合った（O'Malley 1977：71-72）。フォスターは，1960年代後半から70年代半ばまでノッティングヒルに在住，その後，ハマースミスへ転出した。Standing Together Against Domestic Violence の設立に関わり，長年にわたり家庭内暴力対策の市民活動を続けた。ハマースミスにあるグローブ・ネイバーフッド・センターのスタッフを介して，私は2006年にフォスターと知り合った。彼女が，オマリー夫妻をはじめ，1960年代後半にノッティングヒルにおいて活躍した人々を紹介してくれたおかげで，当時の活動家たちへの取材を始めることができた（西川 2010b：157）。

19）ピーポーズ・ニュースには，次のような団体が参加していた。"the People's Centre, the Powis Playgroups, the 1-9 Colville Gardens Action Committee, the Lancaster Centre, and the Powis Square committee"（O'Malley 1977：70）

20）私が話を伺った人々のなかには，50年代末から60年代前半にかけて，留学，就職，視察や，人的交流，メディアの影響によって直接，間接的な「アメリカ体験」をもち，それが各人の活動に大きな影響を及ぼしていた。元活動家たちが，アメリカの50年代後半から60年代にかけての草の根運動やカウンターカルチャーにたいして，ある種の共感をもって語ることが印象的であった。

21）Harukana Show は，2015年１月に200回を重ねた。現地時刻金曜日夜６時から１時間の生放送を続けているが，この４年間に，番組スタッフの多くは Urbana-Champaign から転出した。2015年２月現在では，WRFU のスタジオがあるアーバナ市とホストが住む京都市，米国セント・ルイス，ミクロネシア連邦ポンペイなどをインターネットでつないで生放送の番組を届けている。毎回の放送は，トークを編集して音声と説明文を Harukana Show のウェブサイト（http://harukanashow.org）の Podcast のページにアップロードしている。

22）ジョージ・クラークは，コミュニティ政治における直接行動を効果的に行うための３つのポイントを，自分が参画したプロジェクトを例にあげて提示している（Clark 1972：188）。第１に客観的な研究調査（ex. the Notting Hill Housing Survey in 1967, the Golborne Community Plan in 1970），第２に解決，改善方法を探る実験的試み（pilot work, ex. Notting Hill Housing Service），第３に，責任当局には事態の改善への意識を，地域の人々には希望と参加を促す，民主的で非暴力的な圧力（ex. Social Right Committee）。また，クラークは，コミュニティ・ワークの役割とは，こうしたことを可能にする触媒，つなぎ役，ファシリテーターとなることだとも述べている（同上：189）。

23）たとえばロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの講師を辞してピンク・フロイドのマネージャーとなるピーター・ジェナー（Peter Jenner）も毎回，LFS の集会に参加し，アメリカからやってきた音楽プロデューサーのジョー・ボイドが LFS のミッションを起草している（"London Free School meeting 6, 8th Feb 66"）。ボイドは，「1965年11月にロンドンに到着するとすぐにホッピーが最初の LFS の集会に誘ってくれた」と記し，当時のノッティングヒルの様子を述懐している（Boyd 2006：134）。マイケル・デ・フレイタスは，LFS の集会を開く場所を探し，ジョージ・クラークとコンタクトをとるなどノッティングヒルにおける LFS の実務を担っていた。ジョン・ホプキンズは，LFS をとおしてジョージ・クラークとも知り合っている。筆者によるインタビューのなかでホプキンズは，クラークとタクシーのなかで，ある住民組織の名前をめぐって議論をした思い出を語ったことがある。ホプキンズは，多様な含意をもたせることができる「AND」はどうかと提案したが，クラークは気乗りしなかったようだ。ホプキンズは，２つの集合円を描き，自分とクラークは，重なるところがなかったので，クラークにたいして悪印象を持つこともなかったと話していた。（2011年７月17日ホプキンズへのインタビュー）。

24）たとえば，IT の読者の登録者リストを作成し，そのデータを分析した結果多くの読者が31番のバス路線沿いに住んでいることがわかり，それによって IT の設置場所を検討した，などといったことである（2009年９月２日ホプキンズへのインタビュー）。

参　考　文　献

Boyd, Joe

・2006, *'white bicycles: making music in the 1960s'*, Serpent's Tail

Clark, George

・1972, "Remember Your Humanity and Forget the Rest", in Benewick, Robert and Trevor Smith ed. *'Action Society Studies:1 Direct Action and Democratic Politics'*, GEORGE ALLEN & UNWIN LTD, pp. 178-191

Chevannes, Barry ed.

・1998（1995），*'Rastafari and Other African-Caribbean*

Worldviews', Rutgers University Press
Chun, Lin
・1993, *'The British New Left'* Edinburgh University Press, リン・チュン，渡辺雅男訳 1999『イギリスのニューレフト：カルチュラル・スタディーズの源流』彩流社
Garza, Thomas
・2014, "Introduction", in Thomas Garza ed.,*'Grassroots Media Zine'*, No. 2, Harukana Show org., pp. 1-2, Urbana-Champaign, http://harukanashow.org/archives/category/zinereport
Hall, Stuart
・1960, "ULR Club at Notting Hill", *'New Left Review'*, 1/1. January-February, 1960, pp. 71-72（Written up from notes by George Clark, Secretary of the ULR Notting Hill Study Group）
Hall, Stuart, Les Back
・2009, "At Home and Not at Home: Stuart Hall in Conversation with Les Back", スチュアート・ホール／レス・バック（聞き手），栢木清吾訳「ホームの居心地，場違いな心地」，『現代思想』vol. 42-5, 2014, pp. xviii-xxxii
Hall, Stuart, Kuan-Hsing Chen
・1996, "The formation of diasporic intellectual: An interview with Stuart Hall by Kuan-Hsing Chen", in Morley D. and Chen, K., ed., *'Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies'*, Routledge, pp. 484-503, スチュアート・ホール，（聞き手）陳光興，小笠原博毅訳「あるディアスポラ的知識人の形成」『思想』No. 859, 1996年第1号，pp. 6-30
Hall, Stuart and Chas Critcher, Tony Jefferson, John Clarke, Brian Roberts
・1978, *'Policing the Crisis: Mugging, the State, and Law and Order'*, The Macmillan Press
Hall, Stuart and Michael Rustin, George Clark
・1967, *'People & Politics, The Condition of England Question'*, Easter 1967
Hammersmith Community Development Project
・1973, "First Report 1972-73" Hammersmith Community Development Project
Holmes, Chris
・2005, *'The Other Notting Hill'*, Brewin Books
Jephcott, Pearl
・1964, *'A Troubled Area: Notes on Notting Hill'*, Faber and Faber
加藤春恵子
・2004,『福祉市民社会を創る―コミュニケーションからコミュニティへ』新曜社
Malik, Michael Abdul
・1968, *'From Michael De Fraitas to Michael X'*, Sphere Books
Mason, David
・"Obituary, George Clark: Marching as to peace" in *The Guardian,* October 8, 1997
Mason, David and George Clark
・1972, "Hammersmith Community Development Project"（Correspondence and Requires, 28 August, 1972）, The Committee for City Poverty
西川麦子
・2004,「ロンドン，ハマースミスにおける1970年代のコミュニティ開発の実験的試み」『甲南大学紀要文学編』131，pp. 79-108
・2006, "The Grove Neighbourhood Centre in Hammersmith, London: Successful Achievement of Forgotten Urban Community Development in the 1970s" in Reference Web for Social Research- Department of Sociology, Faculty of Letters, Konan University（http://kccn.konan-u.ac.jp/sociology/research/05/en/3_1.html）
・2007,「ロンドン，ノッティングヒルにおける1960年代初めのコミュニティ活動の試み―あるメソジスト教会牧師とニュー・レフト活動家の取り組み―」『甲南大学紀要文学編』146，pp. 39-67
・2009,「ロンドン，ハマースミスにおける住民の活動の場としての『地域』の創出―情報のネットワークと個人の選択を基盤としたレジデンツ・アソシエーション―」『甲南大学紀要文学編』156，pp. 145-176
・2010a, "Creation of "Community" for Residents' Activities in Hammersmith, London: Residents' Association Based on Information Network and Individual Choice"『甲南大学紀要文学編』160，pp. 176-197
・2010b,『フィールドワーク探求術～気づきのプロセス，伝えるチカラ』ミネルヴァ書房
・2012,「コミュニティラジオをグローカルに開く―アメリカ，イリノイ州，WRFU-LP の日本語番組の試み―」『甲南大学紀要文学編』162，pp. 51-68
・2013a,「多文化接触のメディア空間―米国のコミュニティラジオから」『世界思想』40号，世界思想社，pp. 18-21
・2013b,「運動としてのコミュニティ・メディア―アメリカ，イリノイ州，WRFU-LP とグローカルなネットワーク」『甲南大学紀要文学編』163，pp. 133-152
・2013c, "A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United State", Garza, Thomas ed. *'Grassroots Media Zine'*, No. 1, Harukana Show org. http://harukanashow.org/archives/category/zinereport
・2014a,「地域の多様性をつなぐメディア実践―アメリカ，イリノイ州，アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち―」『甲南大学紀要文学編』164, pp. 113-132
・2014b, "The Ghost of George Clark: From An Interview With Stuart Hall", Thomas Garza ed. *'Grassroots Media Zine'*, No. 2, pp. 3-44, Harukana Show org., http://harukanashow.org/archives/category/zinereport
・2014c,「コミュニケーション・ツールとしてのラジオ」『建築雑誌』Vol. 129, No. 1665, pp. 30-31, 2014年12月号
Notting Hill Housing Service
・1969, *'Notting Hill Housing Survey'*（Initial Housing Survey, Notting Hill Summer Project 1967, Interim Report）,

Notting Hill Housing Service, London
パーク，Ｒ.Ｅ.／Ｅ.Ｗ.バーゼス他著，大道安次郎，倉田和四生共訳
・1972（1925）『都市：人間生態学とコミュニティ論』鹿島研究出版社
Pilkington, Edward
・1988, *'Beyond the Mother County: West Indians and The Notting Hill White Riots'*, I.B. Tauris & Co. Ltd, London
O'Malley, Jan
・1997, *'The Politics of Community Action: A Decade of Struggle in Notting Hill'*, Spokesman Books
Rycroft, Simon
・2011, *'Swinging City: A Cultural Geography of London 1950-1974'*, ASHAGATE
Rustin, Michael
・1968, "Community Organising in England: Notting Hill Summer Project 1967", in *'ALTA The University of Birmingham Review'*, No.4. Winter 1967-1968, pp.189-211
竹林修一
・2014,『カウンターカルチャーのアメリカ―希望と失望の1960年代―』大学教育出版
Widgery, David
・1976, *'The Life in Britain 1956-1968'*, Penguin Books
Williams, John L.
・2008, *'Michael X: A Life in Black & White'*, Century
Williams, Raymond, ed.
・1968, *'May Day Manifesto 1968'*, Penguin Books
Wilson, Andrew
・2005, "Spontaneous Underground: An Introduction to London Psychedelic Scenes, 1965-1968", in Christoph Grunenberg and Jonathan Harris, ed. *'Summer of Love: Psychedelic Art, Social Crisis and Counterculture in the 1960s'*, Liverpool University Press, pp. 63-98

新聞，雑誌記事（Unknown author）
・"Anti Bomb men say 'phones tapped'", *The Times,* 12 September, 1961
・"Times Diary", *The Times,* 6 May 1969
・"Who is George Clark", *The Kensington News and West London Times,* July 18, 1969
・"When Michael X lived next door", *The Kensington News and West London Times,* March 3, 1972
・"Obituary, George Clark" in *The Times,* October 13, 1997

議事録，ニューズレター
London Free School
・1966, "London Free School meeting 6, 8th Feb 66", by John Hopkins
・1966, "London Free School meeting 7, 15th Feb 66", by John Hopkins
・1966, "The Grove: Notting Hill Neighbourhood News Letter", May 23, 1966
People's Association Groups
・1972, "People's News", vol. 1, No. 24, 7th August, 1972
Social Right Committee
・1972, "The Golborne", May 1971

その他
Gammond, Stephen（Director）
・2008, 'A Technicolor Dream' [DVD], Eagle Rock Entertainment Ltd.
Harukana Show（website）
・http://harukanashow.org
（最終アクセス2015年２月）